あいのその　2024年9月号

「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、
『あなたがたに平和があるように』と言われた」

（ヨハネによる福音書　20章19節）

愛の園保育園　042-325-1045

聖書に登場する「平和」という言葉には様々なニュアンスが含まれており、いろいろな訳し方ができます。ある訳者は「神があなたと共におられる」と意訳しました。「神が共にいてくださる」ということが平和であるということは、逆に言えば、神がいないときは平和ではないということでしょう。それは単に無神論者を非難してそのように言っているのではありません。人間がまるで自分が神であるかのように思い上がり傲慢になれば、気に入らないものは裁き、殺し、欲しいものは奪うでしょう。そうやって自分の思うままに振る舞う人間が作り出す世界には平和などあり得ないではないか、ということです。そしてまた、神を信じている人間であっても、神が自分と共にいてくださるということが信じられないとき、不安になり、恐れを抱きます。その不安と恐れは疑心暗鬼や猜疑心となり、過剰な警戒心を生み出すかもしれません。それが今現在の世界の為政者たちの姿なのではないでしょうか。

この聖句は十字架の出来事のあとに起こった物語の一節です。イエスの弟子たちがまさに恐れと不安の中にいたとき、そこにイエスが現われて真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と告げた。どのようなときにも神が共にいてくださる、あなたがたの真ん中に神がいる。だから何も恐れず心配せずに、ただあなたの真ん中にいてくださる神に従って生きなさい、という宣言が語られているのです。神が人間に望むものは、殺し合いでも奪い合いでも疑り合いでもありません。神自らが作ったこの世界、そこに生きる人間、自然、そのたあらゆるものに、あらゆる場所に、神の平和があること、それをこそ、神は望んでいるのだ、ということをイエスは語ったのです。

人間が神に近づこうとし、神に取って替わろうとすることは許されません。しかし、それは人間と神との乖離を意味するのではありません。なぜなら、いつも神の方から人間の側に近付いてきてくださり、平和を実現し、保とうとしてくださるからです。神は私たちを自由に生きる者としてくださっているのですから、平和のために必要な知恵も力も、私たちには本当は与えられているはずなのです。だからこそ、私たちはそれを間違えることなくしっかりと捉え、活かしながら互いに生きていくことが、混沌とした今のこの世の中にあって、より一層、大切なのではないでしょうか。　　（牧師　西脇　正之）